

国木田独歩訳『聊齋志異』をめぐって

劉 陽

Doppo Kunikida's translation of *Liaozhai Zhiyi*

LIU Yang

Liaozhai Zhiyi (聊齋志異), titled in English “Strange Tales from a Chinese Studio” or “Strange Stories from a Chinese Studio,” is a collection of classical Chinese stories by Pu Songling (1640-1715) in the early Qing Dynasty (1644-1912). Comprising close to five hundred “marvel tales” in the shikai (志怪) and denki (伝奇) styles that serve to implicitly criticize societal issues at the time. This book spread to Japan during the Edo Period and enjoyed by many people. Japanese modern writer, Doppo Kunikida is the first person who translated *Liaozhai Zhiyi* to modern Japanese. This paper analyzes Kunikida's four translations of *Liaozhai's* stories

Keyword: modern Japan, Chinese literature, *Liaozhai Zhiyi*, translation, Doppo Kunikida

キーワード：近代日本、中国文学、聊齋志異、翻訳、国木田独歩

はじめに

『聊齋志異』は中国清代に成立した文語体の怪談短編小説集である。「聊齋」は作者蒲松齡の書齋の名、「志異」は怪異・奇異を志(誌)すという意味である。通行本は全16巻であり、中、小篇小説と小話の計491篇¹⁾を収め、「上は王侯から下は乞食に及ぶまで社会各階級の人物を網羅し、老弱、男女、貧富、賢愚、善悪、美醜等が残るところなく、全巻中に描写され²⁾た、中国第一の怪奇譚である。中国の文学史から見れば、明清は白話小説の時代であるが、この『聊齋志異』は紀昀の『閱微草堂筆記』³⁾と共に、文言小説が完全に没落してしまう前の最後の輝きを放つ作品として、中国では広く愛読されている。

1) 版本の違いによって494篇という説もある。

2) 柴田天馬執筆「序言」、柴田天馬訳『聊齋志異』第1巻「嫦娥之巻」、創元社、1951年。

3) 1800年成立。怪談・奇聞の記録を5部24巻に集めた文語体小説集。日外アソシエーツ編集、『中国古典文学案内』、紀伊國屋書店、2004年を参照。

『聊齋志異』が日本に伝来したのは江戸時代の後期であり、明治時代に入って読者層が広まり、中国文学者をはじめ、国木田独歩、尾崎紅葉、芥川龍之介、佐藤春夫、太宰治など、多くの近代作家にも親しまれ、それに対する翻訳、翻案作品がたくさん生み出された。日本における『聊齋志異』の受容について、藤田祐賢は「『聊齋志異』の一側面——特に日本文学との関連において——」（『慶応義塾創立百年記念論文集』、1958年）において、その翻訳・翻案状況を概観し、研究の土台を作ったと言えよう。その後は大野正博「聊齋志異「竹青」について：太宰治「竹青」との比較」（『集刊東洋学』29、1973年）や、張文宏「佐藤春夫における『聊齋志異』の翻訳・翻案の態度：芥川龍之介と太宰治との比較を通して」（『皇学館論業』44(6)、2011年）、陳潮涯「国木田独歩と『聊齋志異』：「竹青」と「王桂庵」を中心に」（『阪大近代文学研究』16、2018年3月）などの研究が挙げられる。だが、『聊齋志異』に取材した翻案作品が目される一方で、翻訳に対する分析はまだ不十分であると考えられる。

千田九一が1953年9月に発表した「翻訳文学としての『聊齋志異』」（『国文学解釈と鑑賞』18(9)）は、翻訳研究の視点から『聊齋志異』を分析したものとしてはほとんど唯一の先行研究である。千田氏は柴田天馬訳『聊齋志異』10巻（創元社、1951年）と、増田渉訳『聊齋志異』1巻（新流社、1948年——のち角川文庫）、田中克己訳『狐の詩情』1巻（養徳社、1948年——のち創元文庫）に共通する作品「胡四姐」を取り上げ、これら三つの訳の書き出しを比較し、それぞれの特徴を指摘した。その上で、『聊齋志異』のような文語体のものは、表現が極めて簡潔であり、漢字そのものの性格の深さや広がりや曖昧さのために、漢文力を持っている日本人訳者の判断もまちまちとなり、そのイメージも多岐多様となりやすいので、それぞれの個性の表れた翻訳が出来上がると述べている。従って、『聊齋志異』の日本語訳の研究は十分に意義があると考えられる。

前記藤田氏の論によると、最初に『聊齋志異』を現代日本語に翻訳したのは国木田独歩である。国木田独歩は『聊齋志異』における4篇の短編を翻訳し、すべて当時自身が編集長を務めていた『東洋画報』に収録した。各作品に関する詳しい情報は以下の通りである。

- ①「黒衣仙」、原作「竹青」、1903年5月
- ②「舟の少女」、原作《王桂庵》、1903年5月（上）、1903年6月（中・下）
- ③「石清虚」、原作「石清虚」、1903年7月
- ④「姉と妹」、原作「胡四娘」、1903年9月

第一篇の「黒衣仙」は『聊齋志異』が現代日本語に翻訳された最初の作品にもなるので、筆者は先にこの作品に重点を置いて原作「竹青」と比較し、分析の結果を以下のようにまとめておく⁴⁾。

まずタイトルについて、独歩は「支那奇談」という角書きを付け、中国から取材した怪奇物語であることを示した上で、「黒衣仙」に変更した。原作は主人公鳥の神女の名前——竹青をタイトルにしているが、『聊齋志異』という全体から離れると、物語の内容と関連していないタイトルは読者の目を引きにくいと言えよう。また、「黒衣仙」に変えると、「黒衣の神女」という要素が提示され、原作より魅力的に

4) この内容に関して2019年10月5日に韓国外国語大学で行われた第3回欧米アジア博士フォーラムで口頭発表をした。

なると考えられ、これが独歩の工夫の表れであろう。この他、『聊齋志異』には中国古代の文化や科挙制度などに関わる固有名詞が含まれている。独歩はこれら日本人に馴染まない言葉をより簡単な概念に変換し、例えば「科挙試験」を「官吏になる試験」と訳した。これによって教育のレベルの低い読者も容易に物語を楽しめるようになったと考えられる。

また、『聊齋志異』は文言小説であり、簡潔で洗練された文体で書かれたものであるために、翻訳する際に必要な部分を補うことは避けられない。独歩は原作に忠実⁵⁾な翻訳を保証した上で拡大訳もしたことが見受けられる。付け加えられた部分は大まかにプロット、人物の心理や感情の動き、事情説明という3つの面に分けられる。独歩の補足によって、ストーリーの流れがより自然になったと考えられ、氏が「黒衣仙」を翻訳した際に物語の読みやすさを重視し、基本的な目的は好みの中国怪異小説をわかりやすく伝えることにあったと言えよう。

本論は前記の考察を踏まえながら、残った3篇、「舟の少女」、「石清虚」、「姉と妹」と原作との比較分析を行う。その前にまず独歩が使った底本を確認する必要がある。最初日本に伝わってきたのは「青柯亭本」⁶⁾であるために、独歩が他の翻訳者と同様、「青柯亭本」系統を底本としたと想定されていた。ただ、陳朝涯⁷⁾は比較分析によって、『東洋画報』の創刊にあたって、親友の矢野龍溪から「王金範刻本」⁸⁾を与えられた国木田独歩は『聊齋志異』の魅力を知り、「黒衣仙」と「舟の少女」を翻訳した後、完本を求めてただちに「青柯亭本」系統の『詳注聊齋志異図詠』を手に入れたので、後の2篇、「石清虚」と「姉と姉」を訳した際には2つの版本ともに手元にあったと指摘した。そこで、今回の比較の際には3つのテキストを用いることとする。

本論文に引用する独歩の訳は『東洋画報』（近事画報社、1903年）、「王金範刻本」は『王刻聊齋志異校注』（齊魯書社、1998年）、「青柯亭本」は『詳注聊齋志異新評16卷』（図書集成局、1904年）に拠る。

一 聊齋志異「王桂庵」と独歩訳「舟の少女」について

最初に独歩が訳した第2篇の「舟の少女」と原作「王桂庵」の比較を試みる。王金範刻本「王桂庵」の粗筋は以下の通りである。

大名府（今の河北省）の貴公子、王穉⁹⁾（字は桂庵）は南へ遊びに行った際に、隣に泊まった舟の

5) 独歩訳「黒衣仙」の結末の前までは忠実な翻訳とは言えるが、結尾のところで大幅に内容が省略された。削除の理由についての考察はまだ不十分で、今後の課題とする。

6) 乾隆31年（1766）、趙起杲が鮑以文ら五名の協力を得て刊行したもので、現存している刻本中、最も早期のものである。収載するところ445篇。本刻本は16巻だてで、はばかって文字を変えたり、改竄や削除を施したり、理由のわからぬ文字の変更や、脱漏、誤記などがある。従来はこれをもとにして刊行されてきたので、本書が流布本の源であるが、現在では『青柯亭刻本』といっても、数種の異本が生じている。

7) 「国木田独歩と『聊齋志異』：「竹青」と「王桂庵」を中心に」（『阪大近代文学研究』、2018年3月）

8) 乾隆32年（1767）の刊行で、18巻276篇。孝・悌・智・貞・義など26部門に分かっている。

9) 青柯亭本は「樗」である。

中で刺繍をしている美しい少女に目を引かれ、詩を吟じ、金の塊と腕輪を投げたが無視される。まもなく船人が帰ってきて、少女が乗っている舟の纜を解いて出帆する。王はその時新婚の妻を失ったばかりで、その少女を嫁にもらおうという意思を表さなかったことを後悔したので、自分の舟を出帆して追ったが追いつけない。彼は家に帰っても少女のことを忘れられず、翌年にまた南に行つて、舟を買って川に沿って詳しく探したが、全く手掛かりがない。ある夜、王は川辺の村に入った夢を見る。夢の中で彼は合歡の木がある庭園で舟に乗っていた少女と再会する。また一年余り後、王は再び鎮江（今の江蘇省）に行った。先代からつきあいのある徐太僕¹⁰⁾に酒を飲みに誘われ徐の家に行く途中、偶然に夢で見た村に入って、長い間恋している少女に出会う。少女の名は孟芸娘といい、船人と見なした人は彼女の父、孟江蘿である。徐太僕の助けで王は孟江蘿の許可を得て芸娘を娶る。三日後、芸娘を連れて家に戻る途中、彼女に金の塊と腕輪を投げたことをからかわれたので、王は冗談のつもりで実家には呉尚書¹¹⁾の娘である妻がいると言う。芸娘は戯言を信じ、川に飛び込む。王は悲痛窮まりなく、大金を使って探したが見つからない。そのまま家に帰ったが、孟江蘿の訪れを恐れ、河南（省）で役人をしている姉の夫のところにも身を寄せる。一年余り後に実家に戻る途中、雨宿りで一軒の民家に入り、赤ん坊を抱いている老婆を見た。その赤ん坊は王に抱っこを求め、雨が止んだ後王が離れようとする際に、「お父ちゃんが行ってしまう」と泣く。老婆は恥じて強制的に赤ん坊を連れて奥に入ってまもなく、一人の美しい婦人がその赤ん坊を抱いて出てくる。なんと芸娘だったのである。芸娘は川に飛び込んだ後、莫姓の老夫婦に助けられ養女になってから十ヶ月後に王の息子を産み、寄生という名を付けた。数日後、王は芸娘と寄生を連れて実家に戻り、着いた時点で孟江蘿が既にそこで待っていたのである。

独歩訳「舟の少女」はこの原作の流れを忠実に再現したとはいえ、大幅な意識が行われている。陳氏は主題と漢詩の訳し方に着目し、原作「王桂庵」の主題の一つである「夢徵」（夢で見た事が現実として起こる）が上手に表現されたにもかかわらず、漢詩と難解な字が削除されたことから、独歩が原作の世界観を十分に理解できていなかったことも窺える。この後、陳氏の論を踏まえながらより詳しく「舟の少女」と「王桂庵」の比較を試みる。

「舟の少女」は「黒衣仙」と同じく「上」、「中」、「下」という3つの部分に分けられる。冒頭から王が夢の中で芸娘と再会するまでは「上」、芸娘が王の戯言を聞いて川に飛び込むまでは「中」、残った内容は「下」である。「舟の少女」の「上」は「黒衣仙」と一緒に5月刊に載せ、「中」と「下」は6月刊に刊行されている。

また、作品のタイトルに「支那小説」という角書きが付いていて、中国から取材した物語であることを示している。しかも原作に従わず、「舟の少女」とした。「黒衣仙」を論じた際既に述べたように、『聊

10) 太僕は中国の官名であり、車馬や牧畜をつかさどる。『中国歴代職官辞典』、国書刊行会、1980年を参照。

11) 尚書は中国の官名である。秦の始皇帝が設置、始めは単に天子と朝臣の間における文書の授受をつかさどる小官であったが、地位が次第に上り、唐・宋代には中央政府の首位に立ち、六部の長官となった。『中国歴代職官辞典』、国書刊行会、1980年を参照。

齋志異』という全体からすれば、「竹青」や「王桂庵」のような主人公の名前を題目にすることは読者の目を引きにくいと言わざるを得ない。それに対して、物語の内容とつながっている「黒衣仙」と「舟の少女」の方がより具体的で理解しやすいと考えられる。

独歩訳「舟の少女」の全体の特徴といえば、簡潔であると言うことができる。主人公王桂庵のフルネームさえも示さず、「昔は支那大名府に王氏という貴族が居た」というように紹介されている。無論前記「黒衣仙」と同じく、プロット、人物の心理と感情の動きなどの補足も付け加えられたにもかかわらず、名前や地名、複雑な親戚関係など簡潔化にされた部分が多く見られる。

更に、原作『聊齋志異』は神の視点、つまり客観的で主人公の内面が描写されておらず、日本の古典文学の語り方に近いが、「舟の少女」からはじめて訳者の視点が見られる。芸娘が王の戯言を信じて川に飛び込んだ後王の状態を描写する場面を見てみよう。

「王桂庵」

王大呼、诸船惊闹、夜色昏濛、惟有满江星点而已。王悼痛。中夜、沿江而下、以重价觅其骸骨、亦无见者。邑邑而归、忧痛交集。

拙訳：王は大声で叫び、周囲の船で騒ぎが起こった。夜色は薄暗くどこまでも広がっていて、ただ川にきらめいている星影が見える。王はひどく悲しみ痛む。中夜に川を下って大金で（芸娘の）死体を探したが、見た人がいない。物憂げに帰り、悲しみと痛みが入り交じる。

「舟の少女」

王は大声をあげて救を求め、近辺に居る舟子どもを狩集めて搜索したけれど、夜は昏し、星は冴え、河水沈々として流るのみ、死骸すら見当たらなかった。

王の絶望は非常であった。一時の戯言で多年恋い焦がれて居た女を失ったのだから無理もない。

傍線部は原作にない内容であり、訳者の王に対する気持ちがそのまま作品に書き込まれている。これが独歩自身の創作である。

二 聊齋志異「石清虚」と独歩訳「石清虚」について

次に「石清虚」を分析する。独歩が翻訳した4篇の中で唯一原作のタイトルをそのまま用いる作品である。前述のように、「石清虚」を訳した際に独歩が王金範刻本と青柯亭本の両方を持っていたが、王金範刻本にはこの作品が収録されていないために、青柯亭本における「石清虚」のみを取り上げる。『聊齋志異』における「石清虚」の粗筋をまとめる。

刑雲飛は順天（今の北京周辺）の人である。石が大好きで、毎回良い石を発見すると、大金を惜しまずにぜひ手に入れる。ある日川で漁をしている際に、網に掛かったものがあり、掬い上げて見たら、1尺ほどの石である。精巧できれいなので、刑は喜んで持ち帰り、紫檀の台に置いた。雨

の日になれば、石の細い穴から煙が浮かび上り、遠くから見れば、白い綿絮が塞がっているようである。ある日ある権勢家が刑の家に来て、この石を奪い、自分の下僕に渡して一緒にその場を離れるが、その下僕が川辺で休憩した際に石を川に落とす。権勢家は水泳がうまい人を雇って探させたが見つからない。その後刑は石が落ちたところに行って川を見ながら泣くが、その石がまだ川の中にあるのを発見し、喜んで持ち帰って奥の間に置いた。

ある日、一人の老叟が訪れ、石を見せてもらいたいと言い、刑はもう既になくなったと答える。老叟は客間にあるではないかと言い、一緒に行ったらやはりそこにある。老叟は石にある穴の数は92であり、また一番大きな穴に粟粒ほどの大きさの「石清天虚供」という5文字があるという2つの証拠を上げ、この石が自分の所有物であると証明する。刑は何も言うことはないが、返そうともせず、老叟が帰った後、石がなくなったことに気づく。彼が急いで後を追いと、老叟からその石の出世が早すぎるために魔劫がまだ取り除かれておらず、どうしてもほしいならば3年の寿命を減らさなければならないということを知り、思わず認める。老叟は石にある3個の穴を閉じ、残った数が刑の寿命であると言って去る。

一年余りの後、刑の留守中に、この石が盗まれる。刑はひどく悲しんで、至るところすっかり探したが、影も形も見つからない。また数年後、彼は偶然に報国寺（四川省峨眉山にある）で石を売っている人のところに自分の石を発見して取り戻そうとするが、売り手に訴えられる。刑は役所で閉じられた穴の痕と5文字の2つの証拠で石を持ち帰ることができた。

ある尚書が300両¹²⁾の銀で刑の石を買おうとするが、刑は万両の金でも売らないと言い、その尚書に他の事で中傷され監獄に投じられる。刑の妻は息子と相談してその石を尚書に献じ、刑は釈放される。事情が分かった刑は妻を罵り息子を殴り、何度も自殺しようとするが家族に止められる。ある夜、刑は夢の中で石清虚と自称する男に会い、石が君と分かれるのは一年余りのみで、来年の8月20日に海岱門（北京の東南にある城門、今の崇文門）に行ったら2貫¹³⁾で取り戻せる、と言われる。翌年、前の尚書が罪を犯して免職されてまもなく死ぬ。刑は時間通りに海岱門に着き、その石を盗んで売っている尚書の家族に会い、2貫で手に入れる。

その後、刑が89歳になった時、自分で葬具を準備し、必ずその石を副葬させるように念を押してまもなく死ぬ。息子は彼の話に従ったが、およそ半年後石が墓から盗まれる。それから二三日経ち、刑の息子が道でよろめきながら顔いっぱい汗をかいている二人の男と出会う。彼らは、天を向いて自分たちが石を盗んで4両の銀で売ったという罪を認めたので、刑の息子はこの二人を役所に連れて行く。だが、役人が取り寄せられた石を見たら欲しくなり、下人に倉庫に運ばせるが、その石は突然落ちて十何個のかけらになってしまう。刑の息子はかけらを拾って刑の墓に埋め直す。

独歩訳「石清虚」の流れは概ねこの原作と同様であるが、簡潔化と奇妙さが強調されていることが特徴である。

12) 「両」は重さの単位である。一両=50グラム。

13) 昔の通貨の単位であり、「制錢」1000文を指す。

本論で既に述べたように、独歩は翻訳した際に難解な固有名詞を理解しやすい概念に変換した。だが、原作「石清虚」における一番大切な内容、つまり石の大きな穴にある「石清天虚供」という5文字までも削除されるのは理解しかねると言わざるを得ないだろう。前篇「舟の少女」について陳氏は、原作「王桂庵」における重要な漢詩と難解な字が削除されたのは、独歩が原作の世界観を十分に理解できていなかったからであると指摘した。だが、この「石清虚」と合わせて考えるならば、独歩は意図的に削除したのではないかと思われる。なぜならば、力を入れて訳しても、原作に含まれている外国の文化、文学背景はやはり理解されにくいから、敢えて省略したのではないだろうか。

また、安載鶴「日本近代以降の『聊齋志異』受容及びその研究」¹⁴⁾に言及されたように、独歩訳「石清虚」には「靈妙」という言葉がよく使われている。この「靈妙」に関連している「奇」も無視できないと考えられる。

①権勢家某というが居て此靈妙を伝え聞き、一見を求に來た、雲飛は大得意でこれを座に通して石を見せると、某も大に感服して眺て居たが急に僕に命じて石を担がせ、馬に策って難有うとも何とも言はず去ってしまった。

②けれども靈妙なる石は遂に影をも見せないの流石の権勢家も一先搜索を中止し、懸賞といふことにして家に帰った。

③其後石は安然に雲飛の内室に秘藏されて其清秀の態を変ず、靈妙の氣を失わずして幾年か過た。

④眺めて居たけれども、噂に聞きし靈妙の働は少しも見せず、雲の湧などいう不思議を示さないの、何時しか石のことは打忘れ、室の片隅に放擲して置いた。

⑤雲飛という人は盆石を非常に愛翫した奇人で、人々から石狂者と言われて居たが、人が何と言おうと一切頓着せず、珍しい石の搜索にのみ日を送って居た。或日近所の川に漁に出かけて彼処の淵此所の瀬と網を投て廻るうち（後略）

⑥例の奇癖は斯いう場合にも直ぐ現われ、若しや珍石ではあるまいかと、抱きかゝえて陸に上げて見ると、果して！四面玲瓏、峯秀で溪幽に、亦と類なき奇石であつたので、雲飛先生涙の出るほど嬉しがり、早速家に持ち帰って、紫檀の台を造え之を安置した。

独歩訳「石清虚」に「靈妙」という言葉は合わせて4回出てくる。引用①から④まではそれぞれの場面である。石の良さについて、原作では、雨の日になれば、石の細い穴から煙が浮かび上り、遠くから見れば、白い綿絮が塞がっているようである、というように描かれている。独歩はこの不思議な現象を

14) 「日本近代以来《聊齋志異》的受容及其研究」, 東北師範大学博士論文(中国), 2010年6月。

「靈妙」という言葉で表し、繰り返して強調している。また、引用⑤と⑥の傍線部が示されているように、主人公刑及び石を言及する際に「奇人」、「奇癖」、「奇石」という表現が用いられている。これらの奇妙さを表す部分は原作にない独歩自身の創作である。

更に、原作の最後に削除された部分がある。物語の内容ではなく、『聊齋志異』の作者蒲松齡自身の感想や批評を付けた話が所々ある。

末尾に「異史氏曰（いわ）く」という、作者蒲松齡は異史氏と自称し、司馬遷の『史記』が、章末に「太史公曰く」という評語を付した体裁に倣ったものだという。

『聊齋志異』「石清虚」

異史氏曰。物之尤者禍之府。至欲以身殉石，亦痴甚矣。而卒之石与人相终始，谁谓石无情哉。古语云。士为知己音死。非过也。石犹如此。何况于人。

拙訳：異史氏曰く。奇妙なものは災いを招きやすい。身をもって石に殉じるまでに至り、愚か極まりない。また最後に石が人と同じ結末を迎え、石が無情であると誰が言っているのか？古いことわざにあるように、「士は己を知る者のために死す」とは、過ちではないのだ。石でさえこうであるのに、ましてや人は言うまでもない。

原作は主人公の石好き癖と「士は己を知る者のために死す」という石の人情が主題とされているに対して、独歩はより怪奇性を重視していると考えられる。

三 聊齋志異「胡四娘」と独歩訳「姉と妹」について

最後に第4篇の訳、「姉と妹」を見てみよう。王金範刻本と青柯亭本ともに原作の「胡四娘」を収録しているので、3つのテキストを取り上げて比較する。前記2つの刻本における「胡四娘」は個別の文や文字の違いが見えるが、物語の流れは変わらない。粗筋は以下の通りである。

程孝思は劍南（今の四川省）の人である。小さい頃から頭がよく、文章も上手であるが、早く父母を失い、貧乏な生活をしている。彼は胡銀台¹⁵⁾に頼んで筆札¹⁶⁾の職を求め、文章を作るように言われる。胡は程の文章を読んで大変好んでおり、「この人は長く貧乏で終わる人ではない。娘を彼に娶わせることができる」と言う。胡は三人の息子と四人の娘がいて、末の娘である四娘以外は全部婚約ができた。四娘は妾腹であり、早く母を失い、十五歳になっても婚約ができていないため、程を婿入りにする。胡が老い痴れているからむやみに決定を下すと胡をからかう人がいて、胡の息子

15) 「銀台」は中国古代の官名である。全国すべての奏状と公文書を主管する官のこと。「漢典」というサイトを参照。リンクは以下の通りである。https://www.zdic.net

16) 公文書や手紙などの作成を担当する仕事である。「漢典」というサイトを参照。リンクは以下の通りである。https://www.zdic.net

たちも程のことは見下げて一緒に食事をせず、下人でさえもよく程を揶揄する。程はただ黙って我慢して読書に集中している。

四娘がまだ婚約できていないところ、人の貴賤を予測できる神巫が四娘を見て「この人は本当の貴人である」と言ったために、程が婿入りした後、姉たちは四娘を「貴人」と呼んでからかう。四娘はしとやかで口数が少ない人であり、毎回周りのからかいを聞き捨てるが、ますます皆に軽蔑されるようになる。ただ一人だけは例外で、三番目の姉を生んだ胡の愛妾である李氏は常に四娘のことを尊重し、よく三番目の娘に四娘を大切にするように勧める。

程が科試¹⁷⁾に参加する前に胡がなくなり、彼は息子のように喪に服し、試験に参加できなかった。喪期が終わったら、程は四娘からお金をもらって追試を受けるが、不合格になる。そのまま帰る面目がなく、余ったお金で首都に行く。当時胡家の親族はほとんど首都の役人であるので、程はからかわれることを恐れ、名前と住所を変え、東海出身の李蘭台¹⁸⁾の門下に入り重用される。その後、彼は李の援助で順天試に及第し、庶吉士の職を授与され、李に実情を伝える。李は程に千両の銀を貸し、下僕を劍南に行かせて程のために住宅を買うことを命じる。胡家の長男が別荘を売っているため、下僕はそれを買ってから車馬を出して四娘を迎えに行く。

ちょうど胡家三番目の息子の結婚式であり、親戚の中で四娘だけが招待されていない。突然一人が入って来て、程の及第を報告する手紙を差し上げる。それを受けて四娘は結婚式に招待され、結婚式場の中心になり、全員が彼女の顔色を伺う。四娘は相変わらず無口で、李氏と三番目の姉だけに丁寧にお辞儀をして離れる。

胡が死んだ後、三人の息子は家の財産を争うばかりで、胡の棺は長い間放置されていた。程はひどく悲しんでお金を出して盛大な葬儀をあげ、村の人々に高く称賛される。その後の十何年の間に程は清廉な官吏であり続け、村の人が困った時に力を尽くして助けてあげる。

ある時胡家の次男が人命に関わるトラブルに巻き込まれて獄に投じられる。長男が首都に行って四娘のところに救いを求めるが、四娘は兄貴がわざわざ遠くから妹を訪ねてくると思ったのに、訴訟のためだったのかと言い、憤然として去る。数日後、次男が釈放されて初めて、胡家の皆は程と四娘が力を出したことを知る。

その後三番目の姉の家がますます貧しくなり、程はいっそう援助を与える。また李氏は息子がいないため、自宅に迎えにきて母の如く養ったということである。

この作品には中国古代の官名や科挙試験に関わる固有名詞が幾つか含まれている。例えば四娘の父は苗字の「胡」と官名の「銀台」の組み合わせで「胡銀台」と表示されている。当時の「銀台」は全国すべての奏状と公文書を主管する官であるが、独歩訳「姉と妹」では「胡という金持ちの人」になる。ま

17) 明清の科挙制度。郷試に対する予備試験である。「漢典」というサイトを参照。リンクは以下の通りである。https://www.zdic.net

18) 「蘭台」は中国古代の官名である。歴史を記録し、編纂する官のこと。「漢典」というサイトを参照。リンクは以下の通りである。https://www.zdic.net

た、公文書や手紙などの作成を担当する仕事である「筆札」、及び歴史を記録し、編纂する官である「蘭台」はそれぞれ「秘書役のような仕事」及び「或る大臣」に訳された。「筆札」を理解しやすい概念に置き換えるのに対し、「銀台」と「蘭台」は対応している言葉との関連が深くないので、忠実な翻訳とは言えない。

また科挙に関する概念は主に以下の場面に集中している。

王金範刻本「胡四娘」

是年、程以公力得入邑庠。明年、学使科试士，而公适薨，程纒经如子，未得与试。遂入遗才籍。四娘嘱曰：“曩久居所不被呵逐者，徒以有老父在，今万分不可矣！倘能吐气，庶回时尚有家耳。”

拙訳：この年、程は胡の助けで県学に入れた。翌年、学政が科試を行うが、ちょうどその際に胡がなくなり、程は息子のように喪に服し、試験に参加できないので、録遺を受ける。四娘は程に「今まで（ここに）長く住んでも追い出されないのはただ父親がいたからで、これからはどうしても駄目だ。もし試験に合格できたら、戻って来た時にまだこの家に居場所があるかもしれない」と言い聞かせる。

青柯亭本「胡四娘」

是年。程以公力得入邑庠。明年。学使科试士。而公适薨。程纒哀如子。未得与试。既离苦块。四娘赠以金。使趋入遗才籍。嘱曰。曩久居。所不被呵逐者。徒以有老父在。今万分不可矣。倘能吐气。庶回时尚有家耳。

拙訳：この年、程は胡の助けで県学に入れた。翌年、学政が科試を行うが、ちょうどその際に胡がなくなり、程は息子のように悲しんで喪に服し、試験に参加できない。喪期が終わったら、四娘は程にお金を渡し、録遺に参加させ、彼に「今まで（ここに）長く住んでも追い出されないのはただ父親がいたからで、これからはどうしても駄目だ。もし試験に合格できたら、戻って来た時にまだこの家に居場所があるかもしれない」と言い聞かせる。

「姉と妹」

その中に父なる胡が亡くなった。程が之を悲むこと恰も実の父の如く、少時は読書をも廃して唯喪に服して居た。或日末の娘が程に向て「父の存在中は、未だ姉達も左まで吾々を馬鹿にすることが出来なかったけれども、最早父の亡くなられた後は長く此処に居て、人々と一緒に住んで居るのは不利でございます。一時も早く都に行って何処かに留学なされた方が宜かろうと思います。」とすすめるので程も「成ほど」と愈々笈を負って、少時く都に留学することとなった。

二重傍線部の「県学」，「学政」，「科試」，「録遺」という4つの言葉は原作に出てくる科挙制度に関わる専門用語である。中国清代地方学校の代表的なものは府学，州学，「県学」であり，その間に程度の上下はなく，平等である。府州県学を総称して儒学といい，儒学の学生を生員といった。当時の科挙には三段の試験があり，各省の生員をその首府に集めて行った第一段を郷試といい，郷試に合格すれば挙人

の資格を獲得する。次に全国の挙人を北京に集めて第二段の試験、会試を行う。会試に合格した挙人はさらに引続き、天子自ら行う第三段の試験殿試に赴き、殿試に及第して、初めて進士の称号を賜わり、高等文官の資格を取得する。だが、この三段の試験に対してさらにこれに附属する小試験があり、「科試」は第一段の郷試に対する予備試験である。「科試」に不合格であれば、「録遺」という追試験に赴かねばならない。また「学政」は天子より欽派される試験を監督する官員である¹⁹⁾。これら日本人にとって馴染まない言葉については、説明するのも容易なことではない。それに対して「姉と妹」では科挙試験に関連している言葉は一切用いられておらず、「留学」という一言でまとめる。『日本国語大辞典』²⁰⁾によると、留学とはよその土地、特に外国へ行って、比較的長期間にわたって学問や芸術・技術などを学ぶことであるので、原作の内容と合わない。

一方で、前記引用部の原作及び独歩訳における四娘が言った話の違いも証拠の一つになるが、言葉遣いだけでなく、独歩は内容に対してかなり自由な意識を行ったことが見受けられ、それによって物語の全体像まで大きく変えた。「胡四娘」の主題は科挙制度を通して見た人情の薄さであると考えられる。最初に程と四娘をからかい、程が高官になった後すぐ取り入ろうとする人たちの醜態が生き生きと描かれている。

それに対して、独歩の訳は原作とは大きな違いがある。まずはタイトルの変更である。前記の「竹青」及び「王桂庵」と同じく、原作「胡四娘」のタイトルも登場人物の名前であるので、物語の内容とつながっているタイトルに変更することは理解できるとはいえ、「姉と妹」というタイトルで原作「胡四娘」をまとめることができないことも明らかである。タイトルが提示しているように、独歩は登場人物を減らすことを通し、原作の複雑な人情をすべて姉と妹のやりとり集中した。具体的なものは以下の表で示す。

プロット	原作「胡四娘」	独歩訳「姉と妹」
胡の子供たちについて	三人の息子と四人の娘	四人の娘
「胡が老い痴れているからむやみに決定を下す」と言う人	ある人	姉の娘たち
程と一緒に食事しない人	胡の息子たち	姉の婿たち
四娘の下女である桂（児）と大喧嘩した人	二番目の姉	姉たち
結婚式を挙げる人	三番目の息子	三番目の姉
程の及第を知った後すぐ四娘に取り入れる人	結婚式場にいる全員 (李氏と三番目の姉以外)	姉たち
人命に関わるトラブルに巻き込まれて獄に投じられる人	二番目の息子	一番姉の婿
四娘の家に救いを求める人	一番息子	一番姉
ますます貧しくなる家	三番目の娘	三人の娘

原作に登場した胡の息子たちの姿が完全に消え、村の人の存在感も薄くなることが窺える。そこで四娘と姉たちの衝突がより激しくなり、作品の主題は社会問題から家族内の問題に変換される。これが独

19) 科挙制度については『宮崎市定全集15 科挙』、岩波書店、2000年を参照。

20) 第二版第十三巻、小学館、2002年、P895を参照。

歩自らの創作である。

また、「姉と妹」には原作にない部分もある。例えば、程が高官になった後の姉たちの様子について以下の描写が見られる。「姉達は今更の如く、末の妹に向って種々其の歡心を得んと努めたが、妹は別に喜びもせず、ほとんど最初姉等が様々の罵詈を加えた時と少しも変らない態度を示して居った」という。この部分は最初の訳「黒衣仙」におけるプロットの補足とは違い、独歩の創作意欲の表れであろう。このように、「姉と妹」は翻訳と言うよりむしろ翻案作品、創作に近いのではないかと考えられる。

おわりに

本論では「黒衣仙」に対する考察を踏まえながら、国木田独歩訳の残りの3篇、「舟の少女」、「石清虚」、「姉と妹」を分析した。「黒衣仙」を通して見た特徴は他の3篇にも見られるが、本論では主に各作品の独特な特徴のまとめを試みた。

最初の訳である「黒衣仙」は結末のところ以外、忠実な翻訳と言える。その次の「舟の少女」の特徴としては全体的に簡潔で、訳者の視点が見える一文がある。更に「石清虚」の場合は、人物間のやりとりと原作者の感想が表す主題が削除された上で、怪奇性を増やすための拡大訳であり、靈妙という言葉も多く用いられ、創作に近いと考えられる。最後の訳「姉と妹」になると、言葉遣いだけでなく、人物関係や作品の全体像まで簡潔化され、物語の主題を科挙制度における人情の薄さを批判することから姉と妹の間の衝突に変換された。更に原作にない創作の部分も付け加えられた。

以上のように、本稿では翻訳から翻案へという国木田独歩の『聊齋志異』に対する訳し方の変化を明らかにした。